

## しつかりと生きればいい

藤山 恵子

私は行き詰まっていた。

自分自身のこと、家族のこと、物事がうまく進まず、どうにもならなくなっていた。そんな時に思い出したのが、以前、回覧板にはさんでやった一枚のペーパーだった。もう、とっくに回してしまった回覧だったが、社会福祉協議会の有償ボランティア協会会員募集という内容であった。

資格や経験のない私だが、何か人の手助けができないか、何か人の役に立つことはできないか、それにより、私自身が、何か得られることができるのではないか。そんな思いが沸き上がった。

わずかではあるが有償となれば、その行為に責任があることを、大きく実感しなければならぬ。途中で投げ出すようなことはできない。も

ちろん、無償だからというて、責任が無いなどということはない。それは、十分に承知している。

しかし、この制度は、甘えることを許さない。ちゃんとボランティアに取り掛かるためには、この制度は、私に合っているのではないかと思っただ。

社会福祉協議会に行き、一通り説明を受けたあと登録をした。

ほどなく、八十歳を越えたヒサさんという利用者を紹介された。

ヒサさんは、もうすぐ九十歳になるおじいさんを自宅で介護をしていた。おじいさんは、寝たきりの状態であった。ヒサさん自身も足が悪く、思うように動けない状態であった。

「ヒサ、おいヒサ」

大きな声で呼ぶおじいさんのもとに、よいしょと、そこらじゅうに取付けられた手すりにつかまり駆け付ける。

オムツ交換、食事の世話、その他日常のことは、ヒサさんが見ていた。一人ではできないお風呂やマッサージ等のサービスも利用していた。

人の出入りが常にあったため、玄関や部屋の汚れが気になっていたよ  
うだ。

おじいさんの介護を、やっとの思いでこなしていたヒサさんにとり、  
掃除はできなかつた。

そこで一週間に一度、一時間で気になっていた掃除をしてほしいと、  
社会福祉協議会に依頼したのだった。

ヒサさんと、社会福祉協議会の担当の方、そして私の三人で話し合い、  
ヒサさんがいつもいる居間、となりの六畳と、奥の八畳間の三部屋に掃  
除機をかける。玄関とそのままを掃除するということになった。

一週間に一度「こんにちは」と、ヒサさんのお宅を訪ね始めた。  
一ヶ月が過ぎた頃、ヒサさんは、

「藤山さん、掃除は適当にすませて、ここに座わってください」  
と、座布団を差し出して、私を待っていた。

「はい」

ヒサさんの向いに座わると

「この間ね、おじいさんが言うのよ。同級生もほとんどいなくなり、オレ一人になってしまったなって。だから言ったの。人は、生きている間は、しっかりと生きればいい。それだけでいいのよって。そうしたら、そうだな。オレは、ヒサ、お前がいて幸せだって。そう言ってくれたのよ。」

穏やかなヒサさんの顔。辛いこともあるだろう。苛立つこともあるだろう。しかし、穏やかなヒサさんの顔には、充実した自信のようなものが満ちていた。

それから、

「藤山さんが来てくれるから、いつもキレイです。もういいから、こっち来て」

と呼ばれる日が多くなった。

いろいろな制度を利用していたヒサさんだが、じっくりと話しができる人は、少ないようだった。話し相手を求めているのだと感じた。

「今日は、からだの調子が悪くて、動くことができないの」

と涙ぐむ日もあった。

本当に、しんどいのだろうと、ヒサさんの手をさすりながら

「ヒサさんの手、とてもいいですね」

「こんな不器用な手は、ダメなのよ」

顔を少し、ほころばせてくれた。

おじいさんが元氣だった頃に、市が主催する講座などに参加して作ったという作品を、いくつか見せてくれた。

外出することが、ままならなくなったヒサさんに、私は家の片隅にあった『大人のぬり絵』をプレゼントした。

何日もかけて、色鉛筆で色を重ねるなどの工夫をこらし、花の絵を塗っていた。

はにかみながら笑顔で、完成した絵を見せてくれた。

私は、多くの人に見ていただければと思い、ヒサさんの了解を得て、玄関に貼ってあったゴミ出しカレンダーの下に、花の絵を飾った。

訪問介護に来てくださる方々に

「上手ですね」

と、言っていたのだいたと、顔をほころばせていた。

次に仕上げた絵は、おじいさんの部屋に飾った。

夏になり、おじいさんの容態が、かんばしくない状態が続いた。

そして、多少の脱水症状もあり、入院することになった。

ヒサさんは、

「私が悪かったのよ。無理にでも食べさせて、飲ませなければいけないかったのに。それができなかつた」

小さな手を握り締めて、涙を浮かべながら自分を責めていた。

「ヒサさん、ヒサさんは本当によく頑張っていましたよ。私の目標は、ヒサさんなんですよ。ヒサさんのように年をとり、ヒサさんのように夫の面倒をみる。誰にでも、できることではありません。本当にすごいですヒサさんは」

ヒサさんの小さく丸くなった背中をさすり抱き締めた。

「おーい、ヒサ」

おじいさんの声が聞けなくなり、ヒサさんはポツンと、いつもの場所に座わっていた。それでも、これ以上足が悪くなつてはいけなないと、家の扉をつたいながら、ゆっくりとゆっくりと歩いていった。

おじいさんが亡くなった。

「おじいさんがいなくなり、藤山さんに来ていただくことも、なくなると思います。いままで、ありがとうございました」

ヒサさんに、頭を下げられた。

戸が開いていたおじいさんの部屋には、見てくれる人がない花の絵と、空になったベッドが、目に入った。その部屋の様子が、ヒサさんの心そのもののように感じられた。

私が、ヒサさんの家に行くことはなくなつた。

しかし、どうしてもヒサさんのことが気になり、車を走らせた。

いつものように

「こんにちは、藤山です」

と、大きな声を出したが、応答はなかった。ガラス越しに中の様子が見えた。片付けられた部屋に、よく着ていたカーディガンがあった。しつかりと暮らしていらっしやる様子に安心した。

しばらくして、またヒサさんの家に行った。

いつものように大きな声で

「こんにちは」

「はい」

ガラガラと玄関を開け

「藤山です、こんにちは」

姿を見せたヒサさんは、私の手を握り締めて、喜んでくださった。

いろいろなこと、取り留めなく話しをした。おじいさんのこと、ヒサさん自身のこと、そして、ぬり絵もやっていることなど。

また、昔に習ったことがあるという大正琴を、やり始めたことなど。



「下手だけど、聞いてくれるかしら」

楽譜と大正琴をケースから、うれしそうに取り出した。

一曲、二曲と弾きながら

「あまり引き留めては悪いから、これでおしまい」

と言いながら、この曲も練習したことがあるのと弾いてくださる。

強い。ヒサさんは、自分の人生を、しっかりと生きていらっしやる。

本当に強い。

『私の目標は、やっぱりヒサさん』

私は、何に行き詰っていたのだろうか。

「何があっても、その時はしつかりと生きればいい。それだけでいい」  
ヒサさんとの出会いは、私の心に、そのような言葉を刻みつけた。